

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 18 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520084

研究課題名(和文) ソクラテス以前哲学における「自律主体としての自己知」の成立とその史的影響の研究

研究課題名(英文) Study on the emergence of the conception of 'self' as autonomous agent in Presocratics and its historical influence

研究代表者

三浦 要 (Miura, Kaname)

金沢大学・人間科学系・教授

研究者番号：20222317

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：叙事詩の時代、詩人たちは人間が宿命論の中で自由意志の主体とはなりえず、盲目的必然に捕らわれた存在であると考えていたが、ソクラテス以前の哲学者たちにおいては、人間は意志、欲求、意図、あるいは熟慮といった行為の内的な動因を有し、自ら決断し行為を選択する主体であり、その意味で、彼らにおいてはじめて自己を明確に自律的な行為主体ととらえる見解が現れたと言えよう。またこのような自律的行為者は、倫理的領域のみならず認識論的領域においても見いだされうる。つまり人は行為における自律性と同時に神助に頼ることのない真理探究における自律性も有しているのである。

研究成果の概要(英文)：In this study, we considered at first the conception of the 'self' in Heraclitus in comparison with that at the age of epos. While the mortals depicted in the epos as slaves to the blind necessity cannot be any agents of free will, according to the pre-Socratic philosophers, humans do have such an inner motive of action as volition, desire, intention or deliberation and can decide and choose their course of actions for themselves; in this sense, it may safely be said that the conception of the 'self' as an autonomous agent was first and explicitly discovered by the presocratics. And this autonomous agent can be seen not only in an ethical sphere but also in an epistemological one: humans have investigative independence from divine intervention as well as behavioral autonomy.

研究分野：哲学

キーワード：自己 自律性 ソクラテス以前 ギリシア哲学

1. 研究開始当初の背景

一般に自己をめぐる問題意識が顕著な形で現れるのはソクラテス(プラトン)とされる。周知の通り、プラトンの描くソクラテスは、毒杯を仰ぐ前にクリトンたちに向かって「わたしを埋葬すると言ってはならず、わたしの身体を埋葬すると言わねばならない」と語り聞かせ、言わば身体としての自己と精神(魂)としての自己を峻別し、後者を真のそれと見なしていた。つまり、ソクラテス(プラトン)においては、人間そして「自身そのもの」(auto to auto)とは身体ではなく精神にほかならず、したがって自己を知るとは、精神、さらに言えば思慮ないし知性を知ることなのである。そしてそのような「自己」の存続は、ソクラテス(プラトン)では魂の神的で不死なるあり方によって保証される。概して「自己」の哲学的探究に関する研究は、このようなソクラテス(プラトン)を起点とし、理性的自己の問題を論じたそれ以後のアリストテレスやエピクテトスを中心に扱うことになる。そして、こうした古代哲学における「自己」概念をめぐる研究では、ソクラテス以前の哲学者たちには、一つの章も充てられず、また言及されてもマージナルなものとしてしか扱われていないのが現状なのである。

国内での研究に目を向けると、そもそもギリシア哲学の研究といえばプラトン、アリストテレスが依然として中心となっており、ソクラテス以前の哲学者に関して研究が盛んであるとはとても言えない状況である。ましてやソクラテス以前哲学における「自己」の哲学的探究に関する統一的な研究は、例えば日本西洋古典学会の機関誌『西洋古典学研究』でも発表されることはほとんどなく、研究が行き届いているとはまったく言い難く、むしろ空白の領域といてよい。言うまでもないが、国内での研究が進展していないというのは、その対象であるソクラテス以前哲学が哲学史(あるいは倫理学史)の中で重要性を持っていないということの意味しない。私はこれまで、ソクラテス以前の哲学を研究の中心的対象としてきたが、近年はまずもってその自然哲学に重点を置いて考察してきた(科学研究費補助金の研究課題で、「初期ギリシア哲学における認識論的観点からの人間把握について」、「ソクラテス以前の哲学の展開における神話の意義に関する研究」、「プラトン哲学の基底における構成的要因としてのソクラテス以前哲学について」がそれに相当する)。その中で、彼らの自然哲学が倫理学と密接不可分の関係にあり、しかもその倫理学説が十分な独創性を備えており、自然哲学だけを考察していたのでは彼らの哲学の総合的な理解には結びつかないと改めて考えるようになった。アリストテレスによれば倫理学はソクラテスに始まったことになっているが、実際には、たとえばピュタゴラス、ヘラクレイトス、エンペドクレス、

デモクリトスなど、幸福や善き生き方について思考した哲学者は多い。したがって、この三年間はこれまでの自然哲学を中心とした研究を承けて、「ギリシア哲学における快樂主義の系譜の再検討とその史的意義の再評価」という研究課題のもと、ソクラテス以前も含めたヘレニズム期までの倫理思想、中でも快樂主義的倫理学説の特質を考察してきた。ただ、その考察の中で、ソクラテス(プラトン)とは異なるソクラテス以前哲学者における「自己」の把握(自己知)のあり方については、これを主題として論じるところまでには至らなかった。従ってその意味で本研究はこれまでの研究のさらなる展開とすることができるのである。

2. 研究の目的

本研究では、主に次の三項目を検討の射程とする。(1)自己とは何であり、自己はいかにしてその同一性を保持しつつ存続していくのか。「自己」の内実や個人の同一性に対する関心は、すでに、外見をさまざまな動植物に変えながらも自己を維持するプロテウスや真のヘラクレースと幻のヘラクレースを物語るホメーロスの叙事詩『オデュッセイア』(第4巻や第11巻)にも明確に見て取ることができる。予備的作業として、ソクラテス以前に先行する時代の一般的な「自己」の把握のあり方を、その表現としての「心」や「魂」に関係する言葉の使用の検討を通じて確認する。(2)ソクラテス以前哲学者の中でも、「魂(精神)」のあり方に深い関心を寄せている者、すなわち、ヘラクレイトス、エンペドクレス、デモクリトスを中心に、「魂」が「自己」として、しかも当時の宿命論の対極にある「自律主体」として確立されていく過程(とりわけヘラクレイトスとデモクリトスにおいて)、そのような「自己」の内実、存続、そして自律性について、相互の影響関係を考慮しながら再検する。特に、運動、変化、生成、消滅の世界にあって、その世界と類似の要素的物質からなる魂(自己)が、いかにその同一性を保持していると彼らは考えていたのか、を考察し、まさに倫理学と自然学の接点としての彼らの「魂」概念の特徴を示す。そうして、そのような自律的自己の概念の確立のソクラテスの魂観への影響も検討していくことになる。(3)ストア派における「自己」把握のあり方、そしてその点でのソクラテス以前哲学との連絡について考察する。ストア派においては、普通の行為者の道徳的行為が、本性的な「自己保存」への「親和性」に基づくことを説得的に示すのが課題となっている。この理論的課題に答えるために出された一連の主張は、ストア派倫理学の基礎の重要な一部分であり、これらの基礎がいかに密接に道徳的魂論と結びつけられているかを示している。ストア派倫理学のこの部分の鍵となるのは、人の「成り立ち」という概念である。「成り立ち(組成)」とは、同一性を持つ

た個人を構成する身体と魂の複合体である人を指しているように思われる。これは「自分自身」であり、「自己」(人は生まれて以後それを保存することに専心している)である。この「成り立ち」という概念からストア派の自己把握を考えたい。そして、人間と宇宙の両自然本性が、ストア派倫理学の第一原理の役割を果たしているが故に、その「自己」把握も、ソクラテス、プラトンのように身体から峻別された精神としての自己の把握にとどまることがないことを示す。

3. 研究の方法

研究方法は、史的影響関係という視点から、各哲学者の著作原典および後代の二次的証言資料を、研究書・研究論文も参照しつつ精確に読解し、それを踏まえ彼らの自己概念を比較検討するというものである。具体的な考察項目は上記(1)から(3)の「研究の目的」に対応して次のようになっている。

叙事詩の時代における「自己」把握の仕方の解明

ヘラクレイトスにおける自律的「自己」発見の意味

エンペドクレスにおける daimon としての「自己」と転生における同一性保持の検討

原子論的「魂」観の考察

ストア派の「成り立ち(組成)」と「自己」に関する考察および研究全体の総括

4. 研究成果

以下(1)から(7)で示すように、古代哲学研究で論じられることがきわめて少ないソクラテス以前の哲学における自律的主体としての自己の概念の成立の経緯を明確にした。

(1)「自己」とは何か? この原初的な問いが、内観により直接的に与えられる個別の「私」の主観的な意識や経験の諸性質ではなく、「自己」の一般的客観的本性、境界、その実在性を問題にする場合、求められる「自己」の規定は、「ひとであること」、「ひとの本質」、そしてそれを踏まえた「あるべき自己」の解き明かしと密接に結びつくことになる。本稿の目的は、このような自己探究の祖型をソクラテス以前の哲学者に求め、彼らが固有の仕方まで到達した「自律的自己」の概念の考察を目的とする。彼らにとってのこの「自律性」は、自らの道徳法則に従うという意味でのカント的な意志における自律性ではなく、まさにプラトンの「責は選ぶ者にあり、神にはいかなる責もない」(『国家』第10巻617E)ということばに端的に表れているように、不合理な宗教的運命論の頸木から逃れて、欲求であれ情欲であれ理性であれ、あるいはそれらの複合体であれ、ともかく自らが有する行為の内的起源に従って行為選択を行う、そのあり方自体を意味している。そのように自己を捉えることは同時に、行為決定や人生の目的

としての幸福の実現について、神ではなく人間を第一義的な主体であり帰責される行為者であるとみなすことでもある。

(2)「汝自身を知れ」(gnothi seauton)

デルポイの神殿に掲げられていた銘は、自己自身を、ひとつの総体として客体化し認識することを求める。ただ、この訓戒は、一般の人々にとっては、何よりもまず、「おまえは死すべき人間にすぎないことを知れ」や、「自らの「身の程」と「分」をわきまえ、くれぐれも不死なる神々の領分を侵してはならぬ」といった宗教的なコンテクストの中での戒めとして解されていたであろう。しかし、そうした受けとめ方とは別に、「自分自身」を宗教的なコンテクストから切り離し、神々や他者との対比においてではなく、自己をまさにそれ自体として認識対象とするよう求める戒めとしてこれを受けとめた人々がいた。そのときこれは、もはや啓蒙的訓戒や単なる処世訓ではなく、明らかに反照的・再帰的な意識を前提にした自己本性の認識を勧告するものであり、自己発見の促しとなるのである。そのような自己の探究に向かった哲学者の代表が他ならぬソクラテスそしてプラトンである。

(3)ソクラテスが探究していたのは他者と区別される personality としての自己ではなく、personhood であつたし、プラトンは「自分自身」を「人間」と換言し、「自分がいったい何なのか」という問いを「人間とはいったい何なのか」という三人称的な問いへと変換して、人の本質としての「自己」を探究している。それはプラトンにとって魂の中でも神に近い性質の理知的部分に定位され、「内なる人間」と呼ばれることになる。こうすることでプラトンは、叙事詩時代以来の伝統的な「死すべきもの」対「不死なるもの」という対立項を越えて、不死なる魂とその神的部分としての理知を人の本質と捉えた。アリストテレスも「思考する部分こそそれぞれの人自身であると考えられる」(『ニコマコス倫理学』第9巻第4章)とし、また、「人が「知性」が支配しているかどうかによって、抑制があるとか、抑制がないとか言われるが、これは知性がそれぞれの人自身であると見なされていることによるのである」(同巻第8章)とも言い、三人称的自己を知性と同定し、われわれの中にあるもののうち最も神的なものとする。彼はプラトンのように魂を不死なるものと認定しはしなかったが、真の自己を知性において見いだす点で軌を一にしている。しかし従来の宗教的枠組みを打破するような自己の探求は、実はすでにソクラテスよりも先に始まっていた。

(4)エペソスのヘラクレイトスはまさにデルポイの銘文の命に応えるかのように自己(「私自身」=魂)の認識に向かった。彼が探究したのも、人間という謎であり人間の意味であった。マクロコスモス(世界)を規制するロゴスがミクロコスモス(人間)を規制

しているとすると、この決定論的な世界観において人間の自由な行為選択の余地は残されていないかに見える。しかし、その規則性を認識すること（これは決して神的な認識ではない）によって魂（自己）はむしろより合理的に（理としてのロゴスに合致して）行為できる。自己認識は万人に付与された力である。そしてさらに言えばヘラクレイトスは、伝統的宿命論を否定し、各人の「エートス（性格）」を行為の内的動因とみなしている。生の質はこのエートスに基づく行為選択の積み重ねに依拠している。彼が人の善悪優劣を語るとき、道徳的能力も含めた相対的知力を問題にしている。このような倫理的評価の可能性自体が人の道徳的主体性を前提としている。いかに行為しいかに生きるべきかを規定している限りで彼は人間の行為における自律性の存在を前提としている。

(5)エンペドクレスもヘラクレイトス同様に自然的決定論の中で自律的自己を確立しようとしているように思われる。彼の自然学では四元から構成される宇宙世界全体が「愛」と「争い」という原理によって周期的に変化し、その変化が「定め」によってなされるとされる。これは運命論への回帰ではなく二つの力の勢力交替の規則性そのものの必然性を語る決定論である。ただ、その決定論は、原理による諸要素への作用が「秩序」や「調和」を目指すものとされていることからわかるように、いわゆる機械論的決定論ではなく、むしろ一定の目的論を許容するものとなっている。そして、人は欲求を真理へと向けるように習熟することで素質に応じた自らの性格を形成することができる。その欲求の向ける方向は最終的に当人の選択にかかっている。放逐と転生の運命をたどるとしてもその責任は自らが負わねばならない。エンペドクレスの倫理は、ヘラクレイトスと同様に還元主義的な自然学に裏打ちされながらも人の自律的で一定の目的を措定した行為選択を認めているという意味で soft-determinism と言えよう。

(6)デモクリトスにおいてはその原子論からして自由意志や自律的人間なるものは成立しえないように思われる。しかし彼の著作断片を見る限り、行為の起源となる快樂欲求は、その発動も含めて機械的・因果的に決定されているわけではない。三人称的「自己」（魂）は、ヘラクレイトスと同様にやはり行為の起源を自らの内にもつという自律性を備えた存在である。運命の配分者ダイモンは自己の外にあるのではなく、魂そのものであり、すべては自己にかかっている。人は自身の魂の中にあたかも道徳法則を確立するかのように、徳を内在化させる。自己としての魂は物質的基盤をもちながらも決定論の支配を受けない意図や欲求や思慮によって自律性を確保する。後にエピクロスは原子論を維持しながらも魂の変容と行為の自律性を確保するという必要性に答えるために、デ

モクリトスの曖昧な両立論を否定し、原子の「逸れ」を導入して非決定論の立場を追求することになる。なお、エピクロスは自己知の一形態としての自己の死の認識についても明確な態度を表明している。つまり、彼はわれわれの直観に反して自己の死が自己にとって無害であると主張している。この主張は少なくとも一人称のレベルでは反駁が困難である。そしてそのことが意味するのは、自己の死が通常の害悪とは異なる特殊性をもっているということでもある。

(7)ソクラテス以前の哲学者たちは、自然学説としては概して還元主義の立場を採っているが、その自然学を枠組みとしながらも、彼らにとっての自己とは、外的要因によってではなく、あくまでも内発的な要因によって行為選択を行う自律的存在であった。後のストア派（彼らによると自己の自然的成り立ちを意識し愛着をもち自己保存の欲求を生み出すプロセスである「親和化」を通じて、人は親和的なものへの傾向性を本来的に有しているが、この傾向はロゴスの自己展開として万有全体へと拡張していくものであり、そこにはストア派の心物全体論が認められる）においてもそうであるが、自然学と倫理学の整合的な接合は、もしそれを彼らが本当に目指していたとすれば、困難な課題であったろう。あえて言えば、彼らはいわゆる「柔らかい決定論」の範疇に入るのかもしれないが、そもそもその問題を自覚していたかどうか問題である以上、そのような分類は意味をもたない。いずれにしても、神人同形論を排して合理的な自然哲学を構築しようと試みていた彼らにとっても、自律的自己を確立することは倫理的にも政治学的にも避けては通れない問題だった。また、言うまでもなく自己の自律性はまた、行為論的側面だけでなく、認識論的側面も有している。ソクラテス以前哲学において見られた宿命論や神話的自然観からの離脱は、人の主体的な真理の探究と認識の可能性をも拓いた。彼らのそうした自律的な真理探究の個別の成果は、むしろ、プラトンやアリストテレスの批判を受けることになるが、しかし、その批判は彼らの自然哲学のあり方そのものの根本的な否定と排除を目指すものではない。むしろそれはプラトン、アリストテレスの実在論や自然学の成立において重要な役割を果たしていると言えるのである。

(8)今後の課題：ソクラテス以前の哲学における自律的主体としての自己概念の成立については、一次資料が相当程度残されているヘラクレイトス、エンペドクレス、デモクリトスについて詳細に吟味検討することができたが、その後の史的展開という点で、特にストア派の心物全体論をさらに詳細に検討することが今後の課題として残ったと言える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

三浦 要, “Quelques notes sur les critiques du pluralisme et du monisme dans le Sophiste de Platon”, 『哲学・人間学論叢』6 (2015), pp.69-84, 査読無

三浦 要, 「死の害悪に関する一考察」, 『哲学・人間学論叢』5 (2014), pp.63-73, 査読無

三浦 要(書評), 「J.Palmer, Parmenides and Presocratic Philosophy」, 『西洋古典学研究』61 (2013), 岩波書店, pp.160-162, 査読有

三浦 要, 「「自律的自己」の起源について」, 『哲学・人間学論叢』4 (2013), pp.57-76, 査読無

〔図書〕(計1件)

三浦 要(翻訳と解説), 岩波書店, アリストテレス 『気象論』(新版アリストテレス全集第6巻), 2015年, 翻訳総頁数 237, 解説 pp.319-346

〔その他〕

ホームページ等

金沢大学人間社会学域人文学類人間科学コース哲学・人間学専門分野ホームページ

<http://philosophy.w3.kanazawa-u.ac.jp/philos/html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三浦 要 (MIURA, Kaname)

金沢大学・人間科学系・教授

研究者番号: 20222317